熊日1971.01.01

わが"市民運動"

対談

日吉フミコさん（水俣市）
後藤国利さん（臼杵市）

公害に明け、公害で暮れた七〇年、それを踏まえて七一年がスタートする。公害爆発の中で、私たちはいやおうなしに、人間とは？市民とは？と考えるようになった。人間らしさを求める戦い—市民運動が全国各地に広がったのも七〇年代の特徴である。そこで本社では新春に当たり、ユニークな市民運動をすすめる水俣病市民会議の日吉フミコ会長と公害追放臼杵市民会議の後藤国利事務局長に、「市民運動の条件」と展望」を語り合ってもらった。

公害という悪魔にいどむ

"水俣病告発"の街頭デモ（熊本市）

追いつめられ出発

—水俣・臼杵—

立ち上がった予防戦争

日吉フミコさん

後藤国利さん

◇日吉フミコさん　水俣市出身、昭和九年熊本女子師範卒。三十八年水東小教頭を最後に教壇を去り同年水俣市議（社党）に当選、四十三年一月水俣病市民会議会長になる。大正四年三月五日生まれ。

◇後藤国利さん　臼杵市出身、昭和三十九年一橋大社会学科卒。家業の臼杵製薬に入り、四十一年同社長、四十五年三月公害追放市民会議事務局長となる。昭和十五年一月六日生まれ。

※につながることなら市民運動と言えると思います。運動をやっているときは私は"社会党の日吉"という感覚は全くない。平気で社会党の悪口も言うんです（笑い）。個人としてどこまで取り組んでいるかが大切。

後藤　その意味でも私たちは体制とか反体制とかいうことばはいっさい使わなかった。おかげで"アカ攻撃"はなかったが反権力闘争というのはまぎれもない事実です。とにかくあらゆる権力は向こう側についたし、権力そのものが公害だというのが実感ですね。

日吉　公害の被害者がいつの間にか加害者にされていくようなところがありますね。

後藤　純粋性を保って小さくきれいにやるか、とにかくひろげていくか、運動の進め方は二つしかない。純粋さだけでは成功はおぼつかないわけだけど、いつでも純粋なところへ戻れる態勢はもっておきたい。絶えず目的意識を失わないことですよ。

日吉　水俣ではひろげようと思ってもひろがらない。ひろがらないからどうするか。告発する会のような組織が周りに出来て、回りから押し上げていく以外にない。市民会議は患者を守る。告発する会は水俣病の恐ろしさを世間に訴えるという風に分担しています。

後藤　水俣のように本当の同情を必要とするところでは回りから怒りをもって噴火しないと、水俣だけではどうしようもない。その点臼杵ではどこととも関係ない。地域エゴーあなたが、私が困るんですよで貫き通す以外にない。人への同情では成りたたない。原点は地域エゴですよ。動き出したあとでの問題は水俣と全く同じですけど……。

日吉　私たちの運動の原点は「怨」の一字につきます。黒旗に白地で「怨」です。

頼れぬ政治・行政

後藤　運動の経過と今後ですけど、私たちの運動は予防闘争ですから、会社の数字に反論するものがない説得力がない。そこで徹底的に向こうの資料をひっくりかえしてセメント関係のあらゆる本を読み、実地調査をしました。その結果得た結論が、学者と役人の言うことはみんなウソと思えばいい。（笑い）

日吉　科学的データという点では私たちは力が弱い。良心的な学者の方々に担当していただいている状態です。

後藤　リコール署名運動—選挙という経過で、結局選挙には負けたんですが、あそこまでやれたということで成功だったと思っています。それより重要なことはこういう選挙があって、そのあとにも絶対に滅びないものが根づいているということを企業や自治体にもわからせていく。しっかりした足どりで、地味に歩いていけば、次の選挙では生かせると思います。

日吉　選挙のためだけの運動ではなく、自然発生的に結集された力ですから、政治を批判していく力になるし、自治体を監視することも出来るんですね。

後藤　今後は大阪セメントへの不信感と公害防止協定の不備な点への批判をすすめ、協定への市民参加を行ないます。将来被害者になるであろう人を結集して、損害賠償協定のようなものにしたい。

日吉　私たちの運動も昨年のチッソ株主総会で一つの節（ふし）を越えたわけですが、今後は裁判と並行して、未認定患者の問題、これは死後全員解剖したらどうかと考えています。また胎児性患者についてはみんな死ぬまでとことんめんどうをみていくつもりでいます。

後藤　運動の過程で一番感じたことは政治も行政もたよりにならないということでした。自治体というのは実に企業に弱いし、さもしいですね。

日吉　過疎か公害かという形で出てくる。チッソが出ていくぞというと、みんなものが言えなくなる。六十年世帯になった水俣に、責任をもってよい企業を興し、水俣病を解決し、水俣市のイメージアップをせよーと私たちは言っているんですがね。

後藤　地方財政制度そのものを変えないとダメですよ。

黙っているのは罪悪

当てにならぬ役人・学者

先輩としての水俣

後藤　市民運動としては水俣の方が先輩。運動のきっかけは？

日吉　私個人のかかわり合いは三十八年の三月に北海道の女子高校生が水俣病患者の見舞いに来た。北海道の人が心配してくれるのに水俣市民である私は一体なにをしたかと思いましてね。胎児性患者を見てものもいえないくらいたまらなくなり、その思いを自分なりに綴めてきました。四十三年の一月に新潟水俣病の患者さんたちが水俣に来ることを聞き、針を胸に突き刺されるような思いでした。水俣人がもっと早く立ち上がっておれば、第二の水俣病は出なかったという胸の痛みでじっとしておれない。これは上黙っていることは罪悪だということですね。作家の石牟礼道子さんらと話し合って会が生まれました。

後藤　私どもの市民会議ですが、四十四年ごろからセメント工場が来るという話はあったんです。いろいろ青年会議所あたりで話し合ってはきたが行動にまでは踏み切れないでいた。たまたま昨年二月私が福岡へ行って友人に、臼杵の人間はバカばかりだからなんにも出来ないという話をしたら、友人からわかっていてなんにもしない人間が一番ダメだといわれてがく然とした。そこで帰ってから突っ走ったわけです。（笑い）

日吉　やりたい、やらねばと考えている人は多いんですよ。しかし〝チッソの城下町〟で、ものを言えば損をする立場にみんな置かれている。私など世間から変っとバカでしょう。（笑い）

後藤　水俣のような風土に市民会議が出来ること自体大変なことですね。その点臼杵では出来るのだけはトントンと出来る。だがそのあとが大変です。戦略論からいえば、津久見のように大きな企業が来てしまってからではもうおそい。相手の力が強いうちにたたいておかないものがいえないと思う。しかし企業は出てくるというだけで大変な力を持っている。

日吉　そうですね。臼杵の場合は予防戦争だけど、うちの場合は被害が出て、生活を破壊されていながらものが言えない。ギリギリのところに追いつめられてやっと出て来た運動なんですね。その点が違うんですが、今後は被害が出てからではもうおそい。その点、臼杵の運動には敬意をはらっています。

足立市政リコールの街頭署名運動（臼杵市）

絶えず原点に帰る

後藤　ときどき自分たちがやっていることは市民運動と言えるのだろうかと反省することがある。他の運動体や組織、たとえば共産党は何に審判を求めるか、それは党中央委だろう。社会党なら労働組合だろう。その点、私たちは市民に審判を仰ごうとした。市民が支持してくれるか、支持してくれる市民を一人でもふやすことが目標だから、市民運動と言えるだろうということになった。胸を張ろうじゃないか。（笑い）

日吉　運動が自分個人の利益ではない。市民全体の利益※

権利意識の定着を

後藤　日本は市民革命を経験せずに、戦後いきなり民主主義を与えられた。したがって市民とか市民権とかなんにもわからないままみんな生きている。政治も動いているんですね。私たちが運動を始めるときには、この運動をきっかけに、臼杵市民が市民としての権利意識を身につけることが出来るならどんなにすばらしいだろうと考えていた。しかしいざとなるとお金に困いし、つまらないねたみも多く、市民意識で説得してもなかなかわかってもらえない。

日吉　水俣では裁判することが悲しいという感覚があるんですね（笑い）。驚くべきことです。

後藤　私たちにも臼杵市民への失望がないとはいえないしがしあきらめてはなんにもならない。私どものささやかな運動を通して少しずつ権利意識や市民意識を定着させていかなければと思いますね。

日吉　たとえ選挙で勝っても富士市のようにかんじんの市長がダメになる例だってありますから。

後藤　市民会議がしっかりと存在し、裁判勢力としてありつづけることですね。選挙で勝っても安心出来ません。

日吉　本当に自覚した市民運動があちこちにひろがり、起こることがだれよりも大切で、それを心から願っています。